



東京・住吉編

我がまち再発見

# 舟歌響くのどかな川旅

## 【編集後記】

「高円寺編（1月12、19日）を大変うれしく読ませていただきました」とはがきに書いたのは、今年78歳を迎える江戸川区の読者です。とくにJR高円寺駅の南側を歩いた19日の記事を懐かしく思われたようです。

扉に花の絵が描かれたお寺として紹介した長善寺にご両親のお墓があり、年3回のお参りをしているとのこと。以前は高円寺駅から歩き、高円寺中央公園（記者が滑り台で遊んでいる写真が載っていました）を通ってお寺に向かったそうです。記者が歩いたコースと重なります。

「地方に住んでいる姉や妹に見せようと（記事を）大事にとっておくことにしました」とも。今は歩くのが難しく、お寺まで車を使っているそうです。記事を読み、お姉さんや妹さんと並んで歩いた記憶がよみがえってきたのですね。

どの街にも、通りにも、誰かの大切な思い出が染みついているのでしょう。そう思って取材すると、見えるものがまた変わってきそうです。（梅）

前回（北砂編）のゴール、小名木川クローバー橋から歩き出す。小名木川と交差する横十間川沿いに南下すると、人を乗せた木造船が浮かんでいた。「乗っていくかい」とのお言葉に甘えることに。

藍色の半纏姿の船頭さんが櫓をこぐと船が水面を切って進む。運航するのは「和船友の会」。江東区

の和船文化を残そうと元漁師や船大工らが1995年に設立した。舟歌や拍子木の音が響き、都会にいながらのどかな時を過ごせる。手を伸ばせば触れそうな水面の反射が美しい。柔らかな陽光を浴びて一杯いききたいところだが、「飲食は禁止」とくぎを刺された。

2月は毎週日曜に無料運航。同会の水見修三さん（70）は「船文化を大事にする思いが受け継がれている。風情を味わって」と話す。約20分の川旅を終え、橋へ戻る。左を振り向くと巨大な「扇橋閘門」が目に入った。

小名木川は江戸時代の初期に開削された運河だ。徳川家康の入城を機に、江戸へ塩などの物資を運び入れる水路として造られた。後に地盤沈下が起きた地域の水害を防ぐため東側の水位を低く保つ必要が生じ、途中に水位差があっても船が通れるよう77年に設置されたのが扇橋閘門だ。

近づくにつれ、威容が迫ってくる。船を扉と扉の間に入れ、その部分の水を出し入れして高さを調整し、進行方向の水位に合わせる方式から「ミニパナマ運河」とも呼ばれているそう。反対側にも回って構造を確かめた。

初詣には遅いが、「猿江神社」にお参り。平安時代後期、源頼義・義家父子が前九年の役で奥州遠征した際に手柄を立てた家臣の猿藤太がこの地で力尽き、神社の境内に葬られたとされる。境内にかわいらしい猿の石像を発見。台に「神猿」とある。「魔が去る」「勝る」に通じ、魔よけの象徴だそう。パンフレットをめくると、記者は今年、運氣が弱くなるという。確かに最近疲れやすい。神猿のお守りを購入した。

「猿江恩賜公園」で一休み。バスケットボールやサッカーをする子どもたちの元気な声が飛び交う。中央にある時計塔の周りには桜が植えられている。春には違う景色を見せてくれるだろう。公園の東側に大きな池がある。案内板のハンドルを回してゼンマイ式の音声ガイドを聞き、この池は「ミニ木蔵」という施設だとわかった。ここにかつて幕府の材木蔵があり、材木を水に浮かべて保存していたそう。ミニ木蔵は当時の面影を伝えるために造られた。

最後に「住吉銀座商店街」へ。買い物バッグを肩にかけた人とすれ違った。夕方は歩行者天国になるそう。最近自炊を始めた記者も豆腐と野菜を購入。青空にくっきりとそびえる東京スカイツリーが、下町風情を残す街を見守っているように思えた。（斉藤新）

このコーナーの感想をお寄せください。編集後記で紹介する場合があります。掲載可能な場合は、住所、名前がペンネームを併記してください。〒100-8055（住所不要）読売新聞地方部「アウトドア体験隊」係。メールはnaishin@yomiuri.com

東京スカイツリーが見える通りは夕方に  
歩行者天国となり、買い物客が集まる



時計塔は桜の木に囲まれている



橋の下をくぐるのも貴重な体験

横十間川でのんびりとし  
を楽しめる（1月8日、  
江東区で）＝川口正峰

